

看護師国家試験取り組みと学生が抱える問題

Nurse state examination match and the problem that a student holds

下川原久子 小笠原みや子 三浦 広美 坂本 弘子

要約 学生の国試に対する取り組みの傾向を把握することで、国試対策への新しい方策を取り入れることができると考えた。学生への補講や模試結果についての感想を分析し、次の結果を得た。① 知識の部分では、模試結果からケアレスミスがあることを自覚している学生が多い。② 学習活動は、補講では知識の確認をしていき不足を補う学習ができている半面、実習と国試の学習の解離を感じている。③ 精神面では、7月頃からマイナーな気持ちを持ち始めており12月は、新たな危機感を感じている学生が多い傾向にある。また、学習の不足感が不安につながっている傾向がある。

は じ め に

看護師国家試験（以後“国試”と呼ぶ）の合格は、本学にとっても学生にとっても看護師資格取得を目指す第1関門である。また、学生の知識上の学習効果を結集できる段階と考えることができる。本学では学習成果を、毎月の学科会議や実習委員会などにおいて報告・検討し、学習効果の点検を行なっている。そして、国試に向けては100%合格を目標に1年次から対策を行なっている¹⁾。近年の全国的な国試合格率は、90%前後となっており、全員合格にはない。そこで、本学では国試対策委員が設置されており、1年次からの国試対策を行なっているが、学生の声を傾聴しな

がらさらに、模試の結果などを検討し補講の追加や模試の再試を行なっている。この国試対策は、学生の主体的な取り組みを理想とするが、国試合格の推移からみても国試対策を学生の自己学習とそれを支援する教員の環境提供も大事であると考えている。また、教育的側面から考えて国試は学生・教員・学内が共に国試に向けた取り組みが必要だと考える。

本学の学生の傾向としては、3年次前期実習中に国試対策に向けた学習の必要性を自己の知識の不足から意識し始める。しかし、実習と国試の学習との両立ができないとの言葉

が多く聞かれる。実習と国試は解離するものではなく、むしろ日々の学習活動が国試につながっていくという発想は、なかなか受け入れにくい状況があると予想された。島田²⁾は、国試を学生自身が自分の問題として気付き取り組むことが必要だと述べている。そして教員は、学生への意識付けが大事であることを付け加えている。池西³⁾は、改定された国試出題基準で最も注目すべきこととして、実践能力を強化するための国試を考えていることだと述べている。そして、国試の問題の3分類のI型（想起型）は臨地実習での体験が大事であると考えている。国試100%合格を11年間も継続できている大日向⁴⁾によると、教育の素地を大学教育の中でつくっている。そのために学生と教職員が国試100%合格に向けた教育が入学時から行なわれていることを共通理解できていると述べている。大日向氏における学習活動が学内での取り組み、学生が主体的に動かざるを得ない課題の出し方

など、教育環境を教員・学生らが作りあげていることが伺える。

国試に向けた学習は、学生が主体的に学習できなければならないと言える。本学のカリキュラムにおいては、看護師国家試験受験を満たす科目とリベラルアーツで構成されている。単に国試受験のためだけではなく、卒業後を見越しての学生の可能性を育てていける教育体制を基盤にしている。しかし、100%合格には学生の個性もあり、学内が組織的に関わっていくことが必要である。そのために本学学生は、実習と国試の学習が平衡できるようであれば、学生の自信につながっていくことが考えられる。そこで、学生の国試に対する取り組みの傾向を把握することで国試対策への新しい方策を取り入れることができる考えた。本稿では、学生への補講や模試結果についての感想を分析することで、学習への思いの現状を明らかにしたので報告する。

I. 研 究 目 的

看護師国家試験対策に対して、学生が抱える問題を学生の傾向と捉え、今後の国家試験

対策につなげていく指標とする。

II. 研 究 方 法

1. 研究期間 平成24年4月～平成25年2月

2. 研究対象 某短期大学3年次国家試験受験者対象者のうち30名をランダムに選択

した。

3. 分析方法

1) 模擬試験結果と補講後、年間振り返りなどの感想文

6月から翌年2月国試受験まで模試や補講の結果を感想文とした。その感想文を1項目ずつ抽出した。

① 6月から翌年2月毎の模試・補講対策の充足感、不足感の現状を分析した。

② 学生の感想文から、どのような感想の傾向をもつのか分析した。

2) カテゴリーの作成

① ランダムに学生30名を選択し、感想文の内容からカテゴリー分類を行なった。

② 国試対策委員4人による複数の教員でカテゴリー分類を行なった。

4. 倫理的配慮

① 研究対象者の人権に関する配慮

・研究に使用する調査票は研究以外には使用せず一定期間保管後破棄する。

・個人が特定されずプライバシーが保護されよう、個人名は出さない。

② 感想文は国試対策の中で反映させると説明し、記載された学生を使用した。

③ 本学・短期大学倫理審査会 No.14-09 で承認された。

④ 感想文は研究中厳重に保管し、終了後はシュレッターにて破棄する。

III. 結 果・考 察

1. 模試や補講からの学び・問題点

6月：補講（表1）

6月の補講は30項目を抽出し、3カテゴリーに分類した。専門実習1か月を過ぎている。国試への意識はまだ薄い時期と考えられる。

しかし、自己の勉強への必要性の自覚が出てきているように考えられる。そして、自信を持ちたいという気持ちも生じていると考えることができる。学習の不足感は病態・解剖生理であった。

表 1. 6月（補講）

カテゴリー	サブカテゴリー
1) 苦手・弱点に気づき復習の必要性の自覚	① 苦手な部分・弱点を理解できた ② 復習の必要性を理解できた
2) 知識不足や学習不足の自覚と、今後の勉強方法の理解	① 多くの学びを自覚している ② 勉強方法を理解できた ③ 病態・解剖生理の学習不足がある ④ 根拠を持って理解することの必要性を理解できた ⑤ 具体的な知識の確認ができた ⑥ 間違い誤解を修正できた
3) 授業内容の理解から自信と意欲向上	① 頑張ろうという意識の向上がみえる ② 理解することで自信につなげることができ希望を持つことができた

7月：補講（表2）

7月の補講は30項目を抽出し、4カテゴリーに分類した。実習3か月に入っている。実習と国試の学習が平衡できない学生が「実習が重荷になっている」に現れている。一方、国試と実習を結びつけられている学生もいる。補講ではあるが、講義によって知識の確認作

業ができている段階と捉えることもできる。学習の不足感は、薬理学であった。薬理は、実習中に患者の治療に関わることであり、看護の展開においてアセスメントが必要なことである。そのために、補講と実習と関連させて聴講していたと考えられる。

表2. 7月（補講）

カテゴリー	サブカテゴリー
1) 自分の現在のレベルを自覚と勉強の必要性の理解	①国試の勉強の必要性を自覚している ②薬理の学習不足がある ③学習の不足感から復習の必要性を理解できた ④問題を解けずに悔しい気持ちがある
2) 実習と国試の勉強を関連付け	①国試の勉強と実習とを結び付けて考えられている
3) 講義における知識の修正	①間違いや理解不足に気づくことができた ②理解することで学習意欲がわいている
4) できない自分へのマイナスの影響	①知識の不足から恐怖を感じている ②実習が重荷になっている

8月：模試・模試後補講（表3）

8月は模試と模試後補講を実施し、30項目、3カテゴリーに分類した。模試では、全体的な知識不足を感じている。実習中であるが、知識と結びついていない実感を抱いている学生が多いと思われた。頑張りたいが、思うように勉強が進んでいないことが伺えた。また、問題の解釈や選択の間違いがあり、知識が曖昧な部分もあると予想される。模試後の補講は、具体的な学習方法を受け新たに頑張る意

欲がおきている学生もいると予想できる。模試を振り返る機会を与えたことは効果的だったと考えられる。

9月：補講（表4）

9月の補講は30項目を抽出し、3カテゴリーに分類した。実習と知識が関連している学生もいる。苦手な部分がしっかりわかり学習の必要性を理解している。補講により、曖昧な部分が見えてきている。

表 3. 8 月（模試・模試後補講）

カテゴリー	サブカテゴリー
模試	①学習の不足感がある（解剖生理と病態、法律・制度、看護技術、老年、成人、小児、母性、精神、ホルモンなど）。
1) 基本的な学習不足と誤答	②実習と国試を関連させた学習不足がある。
2) 学習不足感と頑張りたい気持ち	①頑張りたいと思う気持ちがある。
	②焦りを感じた。
3) 問題の解釈や選択間違い	①答え間違がある。
	②問題の読み間違いがある。
	③二者択一の不正解がある。
模試後解説	①国試に対する情報を得ることができて良かった
1) 情報を得前向きな気持	②時間を有効に使おうと自覚している
	③今から頑張って自信を付けたいと感じている
2) 具体的な学習方法と意欲向上	①成績の具体的な見方、勉強の仕方がわかった
	②必修問題の勉強方法、問題集の選択方法など具体的に理解できた
	③復習の必要性を自覚している
3) 実際のレベルの自覚と今後の対応	①模擬試験に対する気合いが入った
	②現実の成績を知り頑張ろうという気持ちがある
	③ 70% 正答率の誤答が多く自分の知識不足を自覚している
	④自分の成績を自覚し落ち込んでいる

表 4. 9 月（補講）

カテゴリー	サブカテゴリー
1) 苦手な分野の自覚と、復習の必要性	①社会制度に苦手意識がある
	②間違える問題がある
	③曖昧な知識の確認になった
	④法律が理解できた
	⑤勉強不足に気づくことができた
	⑥まだ理解不十分な部分があり自己学習が必要であると感じている
2) ポイント・根拠を理解する学習の必要性	①ポイントがわかり今後に生かしていくと考えている
	②問題を解くときには根拠の理解が必要と考えている
3) 講義内容と今後の自信	①実習中であり確認になった
	②頻出問題の講義で自信になった

10月：補講（表5）

10月の模試は30項目を抽出し、4カテゴリーに分類した。学習の不足感是不変だが、新たに計算問題があがり、解剖生理・病態、関係法規関連は変わらずあがっていた。実習と学習との両立ができてきておらず、不安感や焦りを感じてきている。模試の問題については、相変わらず解釈の間違いや答え違いを起こしている。特に一般問題や状況設定問題が弱い傾向にあった。補講では、知識と

して蓄積できていると思われるが、知識が実習や模試に活用できていないことも考えられる。池西⁵⁾は、具体的な教育方法として有効なことに臨地実習の重要性と学内におけるシミュレーション教育の充実の必要性も示唆している。本学においても、一般問題・状況設定問題に不安がない学生を多くするために、各看護領域で検討の時期に来ていると思われる。

表5. 10月（模試）

カテゴリー	サブカテゴリー
1) 基本的な学習不足と誤答	①学習の不足感がある。 ②法律・制度、関係法規、社会保障制度、薬物、解剖生理、統計、計算問題、成人、母性、の学習不足がある。
2) 学習の不足感と頑張りたい気持ち	①焦り・不安を感じた。 ②頑張りたいと思う気持ちがある。
3) 実習と国試の両立の難しさ	①実習が終わったら気持ちを切り換えて勉強する。
4) 問題の解釈や選択の間違い	①二者択一の不正解がある。 ②問題の読み間違いがある。 ③答え間違いがある。

11月：模試（表6）

11月の模試は30項目を抽出し、4カテゴリーに分類した。実習はほぼ終了している学生が多い。模試の結果からまだまだ学習不足を感じており、その理由に実習と国試の学習の両立ができないことをあげている。国試が

実習と関連していることの意識がやや不足する言葉がみられる。また、実習中の学生の気持ちが国試にむいておらず、模試の時に学習不足を振り返るところに、毎回同様の反省が発生することになっていると考えられる。

表 6. 11 月（模試）

カテゴリー	サブカテゴリー
1) 基本的な学習不足と誤答	①学習の不足感がある。 ②法律・関係法規、基礎学習、単語（ことば）、ホルモン、障害者（制度・疾患）、母性、小児、在宅の学習不足がある。
2) 学習の不足感と頑張りたい気持ち	①頑張りたいと思う気持ちがある。 ②前回の模試より解けた。
3) 実習と国試の両立が難しい	①実習が終わったら国試を頑張る。 ②実習が続いていることを点数が伸びない理由にしない。
4) 問題の解釈や選択の間違い	①二者択一の不正解がある。 ②問題の読み間違いがある。

12 月補講（表 7）・模試（表 8）

12 月の補講は 30 項目を抽出し、4 カテゴリーに分類した。実習も終了し時期的には追い込みをしている学生が多い。しかし、補講後はまだ理解不足感がある学生もいる。一方、徐々に自己のペースを見いだしている学生もいる。11 月の模試の結果が返却された時期でもあり、午前問題の間違いが多い学生、午後問題の間違いの多い学生の傾向が見えてきた。そこで、学習環境を工夫し本番に強い学生をつくっていくことにした。

12 月の模試は、基本的な所に学習不足を感じている。また、問題の解釈不足が続いており、11 月までとは異なり、カテゴリーにネガティブな文のみが抽出されている。ストレスと焦り、不安が見てとれるためこの時期は精神的なフォローが特に必要であることが分かった。本学の学生は自己教育力の側面からもその構成要素では、精神的なフォローが必要であることが示唆されている⁶⁾⁷⁾。12 月からは、ゼミ単位で活動しているためゼミ中心にフォローを実施した。

表 7. 12 月（補講）

カテゴリー	サブカテゴリー
1) 間違いの修正と知識の確認	①知識の確認をすることができている ②誤解釈を修正することができている
2) 学習のポイント	①学習のポイントをつかむことができている
3) 理解不足と必修問題への不安	①理解不足を自覚することができている ②必修問題に不安を感じている
4) 講義への手ごたえ	①予想問題で知識や根拠が広がった

表 8. 12月(模試)

カテゴリー	サブカテゴリー
1) 基本的な学習不足と誤答	①学習の不足感がある。 ②法律、単語(ことば)、解剖生理、病態、薬物、老年、成人、母性、小児、基礎の学習不足がある。
2) 学習の不足感と頑張りたい気持ち	①頑張りたいと思う気持ちがある。 ②点数が取れず悔しい。 ③焦りを感じた。 ④この時期に必修がとれておらず、危機感を感じる。
3) 問題の解釈の間違いがある。	①問題の読み間違い、問題の解釈間違いがある。

1月: 宿泊合宿(表9)

1月の宿泊合宿は30項目を抽出し、3カテゴリーに分類した。国試に向けて自信が回復している。カテゴリーからは、前向きな気持ち

が見られる。ゼミの精神的なフォローと国試の学習が自分のペースで進んでいっていると考えられる。

表 9. 1月(宿泊合宿)

カテゴリー	サブカテゴリー
1) やるべきことの理解と意識の高まり	①国試に向けての意識が高まった ②友人達との学習共有や周囲の雰囲気を感じている ③要点がわかり気持ちのリセットができています ④テストや口答での質問がやる気につながった ⑤暗記と知識を確実にして本番に備えたいと感じている
2) 学習不足感の解消	①詳細の講義で理解が進んでいる ②合宿で曖昧な部分を見直し、理解につなげ自信がついている ③疾病についての理解が進んだ ④苦手分野を学習し解ることができている ⑤あやふやな部分の理解につながりあきらめないで良かったと思っている ⑥基礎的な分野の学習が自信につながった
3) 勉強への集中と規則正しい生活	①勉強しやすい学習環境で良かったと感じている ②勉強に集中することができた ③規則正しい生活に戻すことができた

2月：国試受験振り返り（表10）

国試受験は、30項目を抽出し4カテゴリーに分類した。国試の結果に誤答がありこれまでの学習の振り返りができている。手ごたえのあった学生も多かった。反面、国試の学習を振り返ると、学生にいかに関画的に学習していくことの必要性を意識させていくかは、本学学生の個人差をみると、難しいことも感じられる。大日向⁸⁾の学内では、建学の精神のもと、自主的に取り組む気質と学習行動に対する責任感を醸成する文化・風土が形成されている、と述べている。そのように大学生の勉強をする文化・風土がある環境は絶対的に必要である。

2月：国試対策1年間振り返り（表11）

1年間の振り返りは30項目を抽出し、3カテゴリーに分類した。3年次は専門実習が主となる。その中で、学生の困難感には主に実習と国試の学習との時間管理である。また、知識の部分では、基礎力の不足を感じているがなかなか追いついて行かないことを実感している。一方で、学習活動と国試の学習が結びついていることを実感した学生もいる。その時々行動に精一杯であり、学んでいることが生かされていたとしても実感がない学生もいる。したがって、どのような思いであっても受け止めて、学習意欲を継続させそれが学習活動に反映され、学習効果につながっていくように教員の役割はあると思われる。

表 10. 2月（国試受験振り返り）

カテゴリー	サブカテゴリー
1) 集中力の跡切れと読解力の低下から午後問題の難易さ	①午前問題は解きやすく、午後問題が難しい。 ②集中力が途切れた。 ③午後問題が苦手な分野が多かった。
2) 学習効果	①過去問・模試から実習との関連性を理解出来た。 ②悔いがない。 ③日々の努力が結果につながった。
3) 緊張、学習不足、焦りから誤答	①学習不足のせりから誤答があった。 ②緊張から誤答があった。 ③早くからの国試の取り組みが必要だった。 ④計画的に勉強すれば良かった。
4) 外部講師の講義の効果	①宿泊合宿、講義の効果が出た。 ②講義の内容が出題されたが迷わず回答できた。 ③根拠の解説講義を受け理解できた。

表 11. 2月（国試対策1年間振り返り）

カテゴリー	サブカテゴリー
1) 実習と国試の両立の困難性と必要性	①実習後の国試学習から実習での学びが生かされている。 ②振り返り、事前学習が国試の学びにつながっていた。 ③実習後、過去問を解き、実習中もっと質問すれば良かったと感じている学生がいる。 ④実習が国試勉強につながる事が分かった。 ⑤カンファレンスでの情報共有が国試の学習に繋がる事が理解できた。 ⑥実習領域の過去問の学習をすることにより実習の内容が深まる。
2) 実習中の国試取り組み	①実習の入る疾患の勉強で精一杯である。 ②実習中取りくむ気持ちはあるができなかった。 ③その日の振り返りが精一杯である。 ④1年生から過去問に触れることにより実習に活かしたのではないと思う。
3) 実習終了後の国試取り組み	①実習終了後、しばらく国試に集中できなかった。 ②実習から気持ちが切りかえることが遅かった。 ③計画的に進めることができず後半は焦りが出た。 ④危機感が足りなかった。
4) 実習中の実習グループ学習の効果	①実習グループで疾患の学習を行い共通理解した。 ②グループで勉強し教え合ったり調べたりと知識の幅が広がり点数アップにつながった。 ③ナースフルをグループで行い成績に反映できた。

2. 学習活動と効果のまとめ

月毎に抽出されたカテゴリー38項目から、さらに＜知識＞＜学習活動＞＜精神面＞に3つに分類することができた（表12）。その結果、6月7月は補講により復習ができており自信につながったり、できない自分にマイナスの気持ちを持ったりしている。しかし、学習方法を考えていく気持ちが強いことが考えられる。実習と国試の両立は、7月頃から困難を感じ、10月11月に続いている。8月は、6月7月の学習効果が思うように模試で伸ば

すことができなかった学生が多かった。一方、頑張っていきたいという意欲は感じられる。9月は自己の苦手な領域が見えてきており、前向きな気持ちで取り組みがなされていることが感じられる。10月は、これまでの学習活動の結果が模試に反映された。8月と同様、基本的な問題の誤答や解釈の間違いが続いている。実習と国試学習の両立が難しいという言葉が頻回に聞こえており、感想文からも何うことができる。8月の焦り・不安感と同様の感想であるが、強さの程度は調査ができて

表 12. 6月からの月毎の学びと問題点

月	知識	学習活動	精神面
6		<ul style="list-style-type: none"> ・知識不足や学習不足を自覚し、今後の勉強方法を理解することができている。 ・苦手・弱点に気づき復習の必要性を自覚している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容を理解することで、自信につながり意欲向上につながっている。
7		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の現在のレベルを自覚し勉強の必要性を理解している。 ・実習と国試の勉強を関連付けて考えられている。 ・講義を受けることで知識の修正ができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・できない自分にマイナスのイメージを持っている。
8	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な学習不足があり、誤答が目立っている。 ・問題の解釈や選択の間違いがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際のレベルを自覚することで今後の対応を考えられている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の不足感から焦りなどがあり、頑張っていこうと感じている。 ・情報を得ることで頑張ろうという気持ちになっている。 ・具体的な学習方法を指導され意欲が上がっている。
9		<ul style="list-style-type: none"> ・ポイント・根拠を理解する学習が必要だと理解している。 ・苦手な分野を自覚し、復習の必要性を理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講義内容が実習に役立ち今後の自信につながっている。
10	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な学習不足があり、誤答が目立っている。 ・問題の解釈や選択の間違いがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習と国試を関連させ、両立できない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の不足感から焦り・不安などがあり、頑張っていこうと感じている。
11	<ul style="list-style-type: none"> ・問題の読み間違いや曖昧な部分がある。 ・基本的な学習不足があり、誤答が目立っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習と国試を関連させ、両立できない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手な分野や教科を自覚し復習や学習を頑張ろうとしている。 ・成績を自覚し達成感あるいはショックや悔しいという感情がある。 ・学習の不足感から、頑張っていこうと感じている。
12	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な学習不足があり、誤答が目立っている。 ・問題の解釈の間違いがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・間違いを修正し知識の確認をすることができている。 ・学習のポイントをつかむことができています。 ・講義に手ごたえを感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の不足感から焦り・悔しさ・危機感などがあり、頑張っていこうと感じている。
1		<ul style="list-style-type: none"> ・学習不足感を解消することができている。 ・勉強に集中できさらに規則正しい生活に戻ることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国試に向けやるべきことを理解し意識が高まり、リセットできている。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・集中力の途切れ読解力の低下があった。 ・緊張、学習不足から焦りのため誤答があった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師の講義が反映された。 ・学習したことが反映された。 	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張や学習不足から焦りがあった。

いない。しかし、8月は頑張っていく意欲的な言葉もあり、10月になると実習の問題が大きく浮上してきていることが特徴的である。11月は、模試の結果は8月同様に誤答、解釈不足・ケアレスミスがあると思われる。そして、まだ実習と国試学習の両立に悩む学生がいる。しかし、学生は誤答があり悔しさを感じていることもあり、前向きな学習姿勢は忘れないでいるように思われる。12月は模試において、これまでと同様の結果を示している。補講を受けることで知識の確認を行

ない、国試受験に危機感を感じてはいるが頑張ろうと前向きな姿勢は持続している。しかし、焦りや不安の原因が学習不足からきており、学習意欲を維持できるような関わりが必要な時期である。1月は、補講において学習不足を補い、国試に向けた気持ちの準備と生活の修正もできている。

以上から、学生への国試に向けた意識の持ち方、学習活動への指導、精神的フォローは前期早期から始め個別な指導が必要であることが示唆された。

IV. 結

本学の3年次学生は国試対策取り組みにおいて以下のような傾向を示すことが分かった。

1. 知識の部分では、模試結果をみるとケアレスミスがあることを自覚している学生が多い。
2. 学習活動は、補講では知識の確認をして

論

いき、不足を補う学習ができている半面、実習と国試の学習の解離を感じている。

3. 精神面では、7月頃からマイナーな気持ちを持ち始めており12月は、新たな危機感を感じている学生が多い傾向にある。また、学習の不足感が不安につながっている傾向がある。

お わ り に

国試対策に向けた取り組みでは、学生の学習活動の量的・質的な傾向に関わらず、学内での組織的な取り組みが必要である。学生の個人差を考えた場合、まず基礎学力を身につける段階で学習への動機づけを与えなければならぬと考えられる。本稿では、学生の国

試の学習に対する思いの原因までは、追求していない。また、前期からストレスが多いと予想されたが、測定によって明らかにしていない。今後はストレスの程度が学習に与える影響も考えていく必要がある。

謝 辞

本研究を進めるにあたりご協力いただいた学生の皆様に感謝申し上げます。

引 用 文 献

- 1) 八戸学院短期大学自己点検・評価報告書（2014）. 基準 I-B-2 学習成果を定めている（a）現状. 八戸学院短期大学.
- 2) 島田千恵子（2014）. 特集 国試対策は学生が入学した時から始まっている. 看護教育, Vol. 5 No. 6, 468-471.
- 3) 池西静江（2014）. 国家試験で問われる能力をどう育成するか. 看護教育, Vol. 55 No. 6, 472-483.
- 4) 大日向輝美（2014）. 特集 誠実を胸に刻むこと、ともに未来を語ること. 看護教育, Vol. 55 No. 6, 484-492.
- 5) 前掲 3)
- 6) 下川原久子, 蛭田由美（2011）. 本短期大学看護学科学生の自己教育力の現状（第 2 報）. 産業文化研究 21 号, 79-92.
- 7) 下川原久子（2012）. 本短期大学看護学科学生の自己教育力の現状（第 3 報）. 産業文化研究 22 号, 37-54.
- 8) 大日向輝美（2013）. 特集 合格 100% の背景にあるもの—伝統が育む学習姿勢—. 看護教育, Vol. 54 No. 3, 184-189.